姉妹都市ウラン・ウデ市訪問団

友好と親善を深め帰留

さる七月三日から、姉妹都市ウラン・ウデ市を訪問した山本悟朗氏、吉田敏夫氏、近藤清徹氏ら訪問団一行は、四日から十日までの六日間にわたり、親善の絆を深めてきました。

一行は教育、商工、労働関係など、つぶさに市内を視察し十二日無事帰留されましたが、その紀行文を報告しましょう。

■七月六日、午前一時三十分、私たち一行は、姉妹都市ウラン・ウデ市へ到着した。

姉妹都市の縁結びをしてから、三回目の訪問団である。

空港には、昨年来市されたウ市の助役、オチロフ氏らの出迎えを受けた。折からの降雨に、木が伸びると喜こばれた。

■七月六日　午前十時、ウラン・ウデ市役所を訪問、一昨年来市されたウベーエフ市長の歓迎を受け市の執行委員との友好を深めるための紹介をされる。

幸い、ソ日協力ウラン・ウデ支部結成のためウ市にいたゼミローノフ氏の通訳で、市の概要説明を受けた。

ウ市は一六六六年、市制を施行してから三〇七年の歴史を持ち、かつてはウイルフウージンスクといい、上ウダ川という意味だという。

バイカルまで百五十キ。モスクワまで五千キという。

一九二三年ブリヤート自治共和国としたときは人口三万三百人、その後五十年間で二十八万人となり、このままで行くと明年には三十万人、そして一九八〇年には四十万人になるということだ。

ウ市の中は、鉄道地区（十三万人）十月革命地区（十万人）ソビエスキー（五万）の三区から構成されており、同自治共和国の産業文化、教育の中心地である。

五十年前、ロシアには文盲が多かったが、指導者レーニンが教育を強調し、現在では四万一千人か初等学校、二万人が専門学校に、二万一千人が大学などで教育を受けている。

またウ市には文化、教育、技術農業などの大学があり、夏季にはピオニールキャンプ場で、無償でキャンプなどを楽しむという。

住宅面積は百万平方メートル、そのうち五分の一は、まだ木造として残っており、現在はこの改築が進められていた。

（参考までに、一人当りの面積は十平方メートルである）

これらの説明を受けたあと、原田市長からの親書を読み、使節団の招待の好意に感謝した。

また、贈り物として作製した魚カニなどの剝製、文化センターの写真などを贈ったが、バイカル湖の魚族は種類が少なく淡水魚なので、大変珍らしいと喜こばれた。

この後、市内を案内され、中央文化館前には、今日までの各界功労者の写真があげられたり、中央通りにはロシアとモンゴル兵士の像と戦歿者の碑があり、草花が供えられていたのが印象的である。

アカデミーシベリア分院（科学研究所）では、地質、経済、社会宗教、自然科学、特にバイカル湖に関する研究が進められていた。

特に興味をもったことは、

／工場からの排水はなく、循環サイクルによる完全利用

／第二次産業では資源の完全活用

／河川、魚族保護のため、また交通上からも河川は利用しない。

また、バイカル湖にそそぐ川は三百余あり砂の洲を通って入るので水質は大変よく、最高水深千七百十九メートルもあり、仮に世界の人口が七倍に増えても四百年間は供給できる水量と、清明度六十メートルは、世界一の湖と自慢をしていた。

土俗博物館では、モンゴル人の生活の歴史が保在されており、住居はピラミッド型の木反や獣皮で屋根をはり、ラマ教仏像が数多く飾られていた。特に、婚礼の儀式の一部を演出してくれたが、原始林の中に再現する古来の民族的歴史の伝承に力を用いていることを参考としたい。

土産を前に帰留報告する訪問団

土俗博物館での婚礼儀式の記念スナップ

ピオニールキャンプ場では子供たちの拍手に迎えられて

留萌市からの贈り物である魚の剝製と原田市長のメッセージを読む山本団長

力強い若者たちの行進

この夜は、スルハルバン記念祭（体育祭ともいうべきか）の前夜祭ともいえる青年祭が、スタジアムで行なわれ、色とりどりの旗を持ち、各クラブや地方代表の青年の行進が力強く行なわれた。

そして、優れた青年として表彰を受けた若者たちは、月桂樹を飾ったジープでグラウンド一周、フイールドでは子どもたちによるサッカー、組体操、女子の平行棒など、数多くのアトラクションが演出され、モスクワより声楽家、アンサンブル演奏などで、スタジアムは超満員の盛況でした。

日本では青年祭に参加する市民の現況を省みて、大変にうらやましく感じた。（国柄ということなのか。）

■七月七日　いよいよスルハルバン祭の日である。

一頭だて、二頭だて、三頭だての馬が走る（レースのようなものである）

フイールドではレスリング、洋弓、重量あげなどの各種競技が展開される。

他の会場ではボクシング、バレーボール、めん羊の品評会などが行なわれており、数万人の人で会場はいっぱい、まさに住民の祭典である。

このあと、ピオニールキャンプ場を訪問した。

多くのキャンプ中の子供たちに迎えられたがとくに秋山修正氏が作製されたタコ（かもめに決を配し中央に留萌の市章）は、子供たちの興味をそそったようである

■七月八日　バイカル湖を視察する。定置網場所では、網起し風景を見たが、ちょう鮫（一メートル二十センぐらい）などがとれていた。

この湖は、魚族保護のため一日一回の漁獲、釣りをする場合は管理長の許可が必要であり、違反をすると多額の罰金が課せられる。

また、湖周十五キは森林保護区として、一切の樹木を伐ることは禁止されている。

■七月九日　子供創作展示会場へ向う。生活、労働、生産など民族の歴史が創作画として展示され、動物は生々と描かれ、彫刻など優れた作品が多く展示されていた。

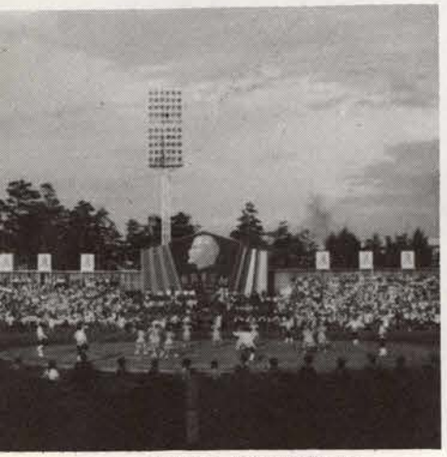
しかし、デザインなどは、日本のようにきらびやかなものは少なかったように思われた。

機関車修理工場では内部の視察したが、最近は電気機関車に移行しつつあるという。

工場博物館では、鉄道の歴史がパネル式に展示されていた。この後、鉄道地区所布のベレズカキャンプ場へ向かう。ここでは千二百人が収容できるという。

キャンプ場の食堂などには木の実などで創作した作品が飾られ中央には原田市長が贈った鳥篭で小鳥がきれいな啼き声を発していた

診療所、寝室も完備されており



スルハルバン記念祭での若者たちによるダンス

この市で鉄道がいかに優位にあるかということを感じた。

十日革命地区では総合病院を視察、五万五千人を対象としており他地区の人は利用できない。

診療検査、治療など八科を有し小児科二棟、産科五百床、一般八百六十床である。

■七月十日　滞在最終日である。

ゾロトクリリエチク幼稚園（金の鍵という意味とか）に向かう。

この地区には八つの幼稚園があり、一園二百八十人（一クラス定員二十五人）が収容できるという

一週あたり十八時間から三十五時間、教師十六人、看護婦七人などが、子どもたちの成長過程や行動の記録をとり、父母えの連絡簿が整備されている。

東シベリヤ工芸大学では十二種目の技術を養成している。

現在の在学生は昼、夜、通信とあわせ八千五百人が学んでいる。

大学は五年制で、牛乳、肉加工穀物、毛皮加工、機械工学などの部門を主体に、最近の希望は建設経済、軽工業などを学ぶことが多くなってきたという。

金属構造工場に向かったが、この工場は橋梁製作工場である。

十四メートルの桁、鉄柱が流れ作業で組立てられていた。

また、この工場は鉄道局の附属工場でもある。

この地区は新しく建設された地区であり幼稚園三十六学級と、六百人収容の寄宿舎や医療施設が建設中である。

特に希望し、中学校を視察したが、一クラス二十五人から三十二人、一～三年は義務教育、四～八年は中級、九～十年上級で授業時間は四十五分という。

上級では、ドイツ語、科学は物理、国語、数学などがそれぞれ独立した教室になっていた。

―今後の交流計画について―

■経済交流について、両方から輸出入希望品目録を交換し、充分検討の上、代表団来留の折回答を得るよう話し合った。

■文化交流について、更に話合いを継続し、姉妹校についても、今後の友好を続ける中で決める。

■ウ市訪問中にソ日協会ウラン・ウデ支部が結成されたことは、使節団として土産の一つである。支部長には工芸大学長、副支部長には鉄道局長、などが就任された。

■本年度ウ市から当市を訪問する使節団は十一月の予定を、原田市長の要請により、九月に変更する旨回答を得、使節団長には鉄道地区議長サンバロフ氏と男女各一人計三人が来留することの発表があった。